

## 『和讃のころろ ～絶対他力～』

聖道門のひとはみな 自力の信をむねとせり  
他力不思議にいりぬれば 義なきを義とすと信知せり

『正像末法和讃』正像末法和讃第五十四首目

8月はお盆ということで、お休みさせて頂きまして今日からまたご縁を頂きたく思います。非常に暑い夏でありましてこの夏の暑さで参ってしまった方もちょくちょくあったのではないかと思います。その暑い最中の9月1日、私は妻ともども誕生日を迎えました。実は私は妻と同じ誕生日なんです。妻の年は言いませんが、私はついに50歳になりました。50歳などは皆様から見ればまだまだヒョッコだと思えますが、私にとっては大台に乗ったということもあり、今までとは違う考えがありました。思い起こしてみますと、まず20代の頃は何か誇りのようなものを感じておりました。いよいよ自分も大人の仲間入りといった具合です。30代になりますと、何か惜別と言いますか青春時代もこれで終わりになったかなと少し淋しさを感じたものです。40代は、一般的には不惑と言いますが、私に至っては惑わずどころか少し焦りさえ感じました。「このままいってしまったらどうなるんだろう。もう折り返し地点を過ぎているはずなのに。もうちょっと何とかしなくては。」というような焦りです。そして、50歳になった現在、40代と同じように焦りもあるのですが、今度は開き直りのような感覚があるのです。いずれにしてもやはり50歳というのはひとつ区切りですから、これからの人生というものをよく考えていかなくてはと思いました。

「人間の智慧というものは、死ぬまで成長し続ける」と教えて頂きました。智慧というのは経験でありますから、一日たりとも違う日はない。ですから死ぬまで成長し続けるのが人間の智慧。その私が仏様の智慧に遇って有難う御座います、というような人生が送らせて頂けている。その為に仏法というものがあるのかと思うわけです。仏法というものを死ぬまで聞き続けたいということ、50歳の誕生日を迎えて改めて思ったわけですが、その仏法が正しく理解されていない。ということも思うわけです。

先日、こんなテレビ番組がやっておりました。クイズ番組でして、最近漢字について多く出題されています。その日は四文字熟語について出題されておまして、家族一同で見えておりました。非常におもしろかったので紹介させて頂きたいと思います。お笑い芸人の方が回答をし、「四文字熟語の○の部分埋めなさい」という問題がありました。

問一、○食○食

もちろん答えは「弱肉強食」であります。お笑い芸人さんはこれを「焼肉定食」と答えたのです。これはよくありがちなお笑いでしたね。そして第二問。

問二、一○○中

これは「一発必中」が答えです。けれども、このお笑い芸人は何と答えたかおわかりますか？ゴールデンタイムにも関わらず「一家心中」。これを聞いて娘が「ゴールデンタイムにこんな答えをだすのか！」と怒っておりました。同じようなことを司会者にも咎められたものですから、もう一度考え直して出した答えが、「一口最中」でした。これは私の思うところで座布団一枚ものなんです。うまいこと答えるなあ」と笑っておりました。

そして三番目は

問三、品○方○

これを「品川方面」と答えたんです。答えは「品行方正」でありますね。これは計算してやっているのか本当な

のかわからないのですが、なかなか面白い。しかし全然答えが出てこないものですから、今度は四文字中一文字だけ空欄を作って簡単な問題を出されました。それが

問四、一日千〇

一日千秋なのに関わらず、「一日千円」と答える。それで私も大笑いして、娘二人も本当に笑いながら見ていたのですが、何かその笑い方がそのお笑い芸人を馬鹿にするような「あの芸人あほちゃうか」という上から目線の雰囲気を感じたんです。ですから、少し嫌な気持ちになりまして、娘たちに向かって

先生：「なんだお前ら。四文字熟語が得意なのか!？」

娘さん：「このくらいのことはわかる」

先生：「はいじゃあ、この問題はわかるか」

といてこの問題を出しました。お寺の娘であります。ご聴聞をしておるわけではありませんが、大きな法要になると無理こやっこに座らされてご法話を聞いておることがありますので、このくらいのことはわかるだろうと思って出した問題が、「他〇本〇」。言うまでも他力本願であります。けれども、当然ながらわかるだろうと思っただ娘が頭を抱えてなかなか答えてくれない。

先生：「いくらなんでもお前ら、それはないぞ。お寺の娘なんだからこれくらいわかってくれよ。」

娘さん：「わかるよ。大丈夫だから。わかるわかる。」

と上の娘が答えた答えは「他人本人」

先生：「なんじゃそりゃ。」

娘さん：「他人と本人で全ての人ということだよ。人間のいのちはすべての人がつながりあって自分のいのちがあるんだから、そのことを言う言葉が他人本人という言葉だよ」

先生：「そんな言葉聞いたことないわい!」と言ってやったんです。お寺の娘ですら、なかなかこの言葉、わかっておるつもりでおったんですけどもわからない。聞いたことはあるのでしょうか。この瞬間、下の娘が

「他力他力と思うていたら思うたところがみな自力」

そんなことを言いました。カレンダーから言葉だけを覚えていて、他力他力と思っている中で、その言葉に引っ掛けていったということですが、多分その意味は分かっていないんでしょう。わかっていないんでしょうけれども、「仏法とは何ぞや」と言うならば、やはり私達浄土門の者からしてみれば、この他力本願に尽きると思います。四文字熟語とは言いたくないのですが、他にも真宗浄土門の根本として言われるのは「悪人正機」「浄土往生」があります。この三つの考え方があるのではなくて、この三つが当然それぞれ繋がっているのです。例えば、阿弥陀仏が「私たちが必ず救う」という本願をたて、その本願を伝えるはたらきが他力というはたらきであります。そして他力本願というものは阿弥陀仏の救済そのものであって、その救いに照らされることによって私たちは救われようのない我が身であるということに気付かせて頂くのです。「その悪人そのものが救いの目当てであった」という教えに遇わされて、浄土に生まれて往生し、仏となって覚りを得る。覚りを開かせて頂く。「他力本願」「悪人正機」「浄土往生」の三つが重なり合って私たちの信心というものがあると言っていいのだと思います。その根本がご本願ということであると思います。そのことが分かっていないということは非常に問題だと思うのです。

この他力本願という言葉。仏教の言葉が沢山ある中で非常に誤用されがち、誤った使い方をされる言葉であります。どのように誤っているかと言いますと、「他人任せ」や「他人の力を当てにする」という風に他力本願という言葉を使っているのにちよくちよく出くわすんですね。

少し歴史を振り返ってみますと、1968年国会で倉石農林大臣がこんな発言をされました。「これからは親鸞のような他力本願では日本は守れぬ。」この言葉にですね、真宗十派が問題提起をして倉石大臣が謝罪をすることになり、実際倉石大臣は謝罪をされました。しかし国会で挨拶を聞いていた他の人達は、他力本願の意味が分からない。そこで当時、今は故人であります、西本願寺の僧籍を持ち、宗門代表の議員さんである参議院議員の川

野さんという方がお見えになった。そして、その川野議員さんが予算委員会で「他力本願」ということを説明するという機会があったわけです。他力本願の誤用を無くするために、大きな事件として今でも伝えられています。今そういった議員さんが国会にはいらっしやいません。けれども、先日の参議院議員選挙、九州の方でありましたが西本願寺の末寺のご住職、龍谷大学卒業の方が比例代表で立候補しておりましたので、その方の個人名で私は投票しました。なぜ投票したかと言いますと「政教分離が原則であります、やはり大切な言葉が間違っ使われる時に説明して下さる方が一人くらいおられてもいいのでは」と思ったのです。しかし、大差で落選されてしまいまして、非常に残念だなと思いました。

当時は川野という議員さんがおられて治まるかなと思っていましたら、1969年、広辞苑第二刷のことであります。これまでの広辞苑は他力本願という言葉の説明は、「阿弥陀如来の本願」とだけ書かれてあったのが、この年の第二刷では第二項が設けられて、こんな言葉が追加されたのです。第一項は「阿弥陀如来の本願」。そして、第二項には「もっぱら他人の力を当てにすること」と入れられてしまったのです。広辞苑の影響力はすごく強いんですね。第二項ではありますが、そのように説明されてしまいましたから、そこから他力本願の誤用がものすごくたくさん出てきたのです。新聞、テレビ、ラジオ、例えばスポーツ関係が多かったですね。「ドラゴンズが優勝するためにはもう他力本願しかありません。巨人に負けてもらうしかありません」。相撲でもそうです。「玉ノ海が優勝するには、北ノ藤に負けてもらうしかない。他力本願しかない。あるいは自力本願で優勝してほしい」とやたら誤用が増えていく中で、本願寺を始めとした真宗十派がその都度一生懸命に啓発活動を行います。新聞にそういった誤用が出たとすると、その新聞社に連絡してお願いしたり、説明をしたりなどの啓発活動を盛んにしました。その結果、誤用が徐々に無くなっていきました。しかし、2002年。大手の写真メーカーであります。覚えている方も見えるかもしれませんが、全国紙一面広告にこんなCMを出し、キャッチコピーとして大きくこの言葉を載せてしまったのです。それが何かと申しますと、「他力本願から抜け出そう」。やってしまったんですね。このこともすぐに教団連合全体で抗議文を送りました。そうしますと、写真メーカーもお詫びをして下さり、さらに新聞等でもお詫びが出され、それぞれの宗門の印刷物にもお詫びの広告を載せて下さいました。この機会にまた改めて「他力本願」というものを考えて頂くという雰囲気マスコミ中に出てくる中で、広辞苑では第二項「もっぱら他人の力を当てにすること」という言葉の中に「転じて」という言葉を入れてくれたわけです。第一項が「阿弥陀如来の本願」第二項が「転じてもっぱら他人の力を当てにすること」という言葉。「転じて」というのは「本来は違う意味なんだけれども」ということが含まれているんですね。我々から言わせてもらいますと、第二項は消してもらいたいなあと思うのですが。そうして、だんだんと雰囲気が変わる中で、一番大きかったのは共同通信社の記者ハンドブックの用字用語集で二十年程前に「他力本願」の用語が加えられたことです。その説明が「浄土門で阿弥陀仏の本願によって救済されるの意。比喻の他人の力を当てにするの意で使わない」とはっきり書かれたものですから、マスコミでの他力本願の誤用は非常に少なくなってきました。現在でも単発的にはありますが、ほとんど無くなってきた状況になりました。

しかし、マスコミ関係での誤用はほとんど無くなってきましたが、一般社会の中ではいかがでしょうか。平気で使われていますね。前にも言いましたが、旅先のシールが貼ってあり、他力本願と書かれたシールがあります。これには「自分が楽に自分の思うようになりますように」と説明がされている。全くの誤用ですね。そういった言葉が未だに無くならない。何故誤用されるのか。と言うならば、「他力本願」という言葉、「他の力を願いの根本とする」と読めないことはないですから、どうしても「他の力」と読んでしまうのかなあと思うんです。しかし、仏法をちゃんと聞いて下さっておられれば、この言葉は浄土門においてとても大切な言葉、仏法全体でもこれしかないということはおわかりになってもらえるはずだと思うんです。しかし、それが無い。「仏法そのものが大切にされていない。もっと言えば、宗教そのものの意味が分かっていない」ということがあると思うんです。

今日は「絶対他力」というサブテーマを挙げております。仏法が正しく理解されていない、宗教そのものが正しく理解されていないということについて、私が最近気になることは語呂合わせです。よく聞かれることを挙げますと、

「お寺さん、お線香は何本寝かせればいいのですか？」聞かれる方は純粹に聞いて下さるのですが、「他の方のアドバイスによると4本と聞いたのですが、、、」と言われるんです。

「何故4本なんですか。」と聞きますと、

「死者を供養するということだからこの死(し)＝四(し)というのが大事なのはないですか。」と言われるんです。これは全くの語呂合わせなんですね。スーパー銭湯に行きますと、4番(死)、9番(苦)、42番(死人)、49番(死苦)はロッカーがありません。このような語呂合わせが非常に多い。なぜ数字の語呂合わせが結び付けられていると言いますと、「誰もが死や苦が嫌だ」ということもあると思います。

ある庄屋さんの電話番号が4229。あるお客に「いい番号だなあ。4229(世に福)だなあ」と読まれたので、ご主人はすごく喜ばれたそうです。チラシや看板に「世に福(4229)」という言葉を入れて、電話番号と合わせたそうです。そうして喜んでいる最中に、また違う人が「そうか世に福か。しかし、こうも読めるなあ。」と言われたのが「4229(死人に苦)」と読んでしまいました。これには主人も「こんな風にも読めるのかあ」とショックを受けて、チラシも看板もすべて変えて、供養までしてもらって、電話番号を変えてしまったそうです。

人間である以上、確かに死や苦というものは遠ざけたいと気持ちは誰にでもあると思います。しかし、仏法とはそういった死や苦、自分にとって都合の悪いものを遠ざけるためのものではありません。「仏法とは何か？」と言うならば、生死を超えた世界。死が無くなるわけではない、苦が無くなるわけではない。そういった死や苦を自分のものとして頂いて、その上で死とか苦を通して本当の幸せにならせて頂く。つまり、生死を超えた世界というものを求めるのが宗教の原点であり、仏法の原点なのです。

その仏法の原点、仏教が何かと言いますと、紙面を見てもらいますと「糞掃衣」と書かせて頂きました。仏教が仏教である以上は、当然ながら全てが釈尊の正覚(さとりに)帰納します。仏教が何宗だろうか何派であろうがお釈迦様の悟りに必ず帰納するわけです。お釈迦様のさとりに帰納するということであれば、お釈迦さまのところに立ち返って考えることが必要なのではないかと思います。お釈迦様は、35歳で浄土の正覚(＝浄土でおさとりに)を開かれてから80歳で涅槃を迎えられるまで糞掃衣で過ごされたそうです。糞掃衣とは、人間の排出物をきれいにするためにインドの上流階級の人たちは布を使います。その布できれいにしたら、その布を捨ててしまいます。その捨ててある布を集めて、きれいにしてつなぎ合わせた衣を糞掃衣というんです。お釈迦様は生涯その糞掃衣で通された。ということは物質的には非常に貧乏であったと言っていると思います。しかし、精神的な豊かさは2500年後の今日の私たちの心を潤し続けて下さっています。

今現在はお寺さんの衣を見ると、非常にきれいですよね。お葬式などの七条袈裟なんかはものすごく煌びやかな衣をつけておられます。「お釈迦様に立ち返ると糞掃衣なのに、どうしてそのようにきれいになったか」を調べてみたことがあります。お釈迦様だけでなく親鸞聖人はもともと天台宗の僧侶であったので、黒衣&墨袈裟でという衣でありまして、色は黒となるわけです。そういった形なのにどうして七条袈裟のような煌びやかなものが出てきたのでしょうか。これの答えはだいたいわかりました。何かと申しますと、今でも仏教会があって、他宗派の僧侶の交流がよくあります。真宗だけに高田本山に絞っても、報恩講などの大法要になると真宗他派のお寺の方がご焼香に来られます。本願寺さまなどになりますと、知恩院や親鸞聖人が得度された青蓮院などのお寺の方が来られたりします。このようなことは、高田本山でもありえるということをお山の関係者が仰って見えました。他派との交流が昔から盛んにあるんですね。それで本願寺さまが三百回忌を迎えられた時代、石山本願寺でお勤めされました。そして、他宗派のお寺さんをたくさん呼ばれるということで、本願寺さまは他のお寺さま達に見劣りしないような衣を導入しようということになったそうです。ですから初めて七条袈裟が導入されたのは三百回忌の時だそうです。それからおそらく高田派でも七条袈裟のようなものが導入されたのでしょう。しかし、現

在では高田本山では七条袈裟は使いません。何代か前のご法主さまが七条袈裟を使わないように、とお決めになりました。これは親鸞聖人の時に還ろうと言う意味もあったのかもしれませんが、実際には末寺に未だ残されており、ですから、お葬式などでは最高の衣体で送らせて頂くという意味もあって、今でも七条袈裟は末寺で使わせて頂いているわけです。もともとを辿るならば、この七条袈裟も縫い目がたくさんあって、布を継ぎ合わせた形になっています。ということは、やはり糞掃衣に根本があるわけですね。話が反れましたけれども、物質的には非常に貧乏な状態であったけれども、精神的な豊かさは非常に人の心を凌駕している。ということが、お釈迦様や親鸞聖人の時代には言えるのかなと思うんですね。

親鸞聖人がはっきり言って下さったことは、身の病と心の病ははっきりと分けて考えて下さったことにあると思います。身の病というのは、医師に任せるしかありません。しかし心の病というのは、心の迷い・悩みでありますから仏法に任せるしかないのです。身は病んで貧しく生きていっても、強く生きていけるのが仏法であります。そこをまず「仏法とは何ぞや？」と考える時に抑えて置くべき所なのでは、と思うわけです。仏教はすべて釈尊のさとりに帰納するわけですから、「他力」という言葉もお釈迦様のさとりというものに照らし合わせて考えなくてはならないと思うわけです。

それでは「他力」と「自力」を考えて見ましょう。他力は「釈尊の正覚に帰納する」ということですので、こういった自力の行も、そして他力も、お釈迦様のさとりを得る、さとりを開く、そのことのために他力と自力という言葉もあるのだと思うのです。

現在では他力と自力という言葉の中で、いろんな宗旨宗派がいろいろな事を行っています。例えば比叡山では千日廻峰行というものがあります。この行は、釈尊の荒行の追体験と言って良いと思います。苦行といいますが、苦行に苦行を重ねられた上に、お釈迦様はその苦行を捨てられて、菩提樹の樹の上で瞑想されて、そして瞑想の中でついに浄土、さとりを開かれるわけです。また座禅というのは、釈尊の菩提樹の下での瞑想の追体験です。千日廻峰行などは非常に厳しい修行ですね。七年間で地球を一周するくらい駆け巡ることが伝えられています。そして九日間で断食断水不眠不我、食べない飲まない眠らない横にならない、そういった激しい行を行うのです。この行が何かと言うならば、お釈迦様がこの苦行を通してさとりを開かれたんだ、さとりを得られたんだという解釈から、この千日廻峰行などの荒行があると思うんです。この行を終えられた僧侶が仰っていたことがあります。それは「これからは他力かもしれない」という言葉。正直ビックリしました。何か自分がほんとの仏になられた、さとりを開かれたということを仰って下さるかと思っていました。それが、この行を終えられた僧侶が言われた言葉は、「自分という者がいかにちっぽけで無力な存在かということがこの行を追えてわかりました」というものだったのです。「これはすごいことを言われているな」と思っていました。

また座禅という行の中では臨済宗ではなく、曹洞禅か黄檗禅のどちらかと思うのですが、座禅の行を座れなくなった人、この行がやれなくなった者は最終的には念仏三昧といった行があるんだということをたまに聞いたことがあります。実際はあまり知られていないのかもしれませんが、この念仏とは何を指すのかはわかりませんが、念仏三昧があるということが伝えられている。

いずれにしてもこれは自力の善行であります。その自力修行を行じられないもののために阿弥陀如来の本願を仰げとお勧め下さっているのがお釈迦様の正意といって良いと思います。そのことを説かれた教えが「仏説無量寿経」と言って良いと思います。

他力ということを順に説明させて頂きたいと思いますが、皆様にもちょっとお聞きしたいことがあります。「他力とは他人任せか？」いかがでしょうか。先ほど他人任せではない、とお答え致しました。ではお渡しした中日新聞の記事を読んでください。様々なご意見があるでしょうが、この他力という言葉、母親の胸で母親に全て身を任せているあかちゃんを他力の象徴として伝えられることが多く在ります。何も疑いなく全て母親にお任せする。

確かにそういった意味もあるでしょうが、小さな子供が親に養って頂く意味で言うならば、他力という意味が無いんじゃないかということですね。では若年労働者、働けるようになった人がもしですね、死に物狂いで働いてどうにもならないような状態になって、それこそ親に頼るしかない、配偶者に頼るしかないという状況になって、世話になるようなことでも他力ではないということが言えるのか、ということですね。結論から言いますと、他力以前の問題なんですね。「他力とは何ぞや」と言うならば、はっきりと親鸞聖人が「他力とは如来の本願力なり」と仰って下さったわけです。阿弥陀如来様が全ての衆生を救おうとたてて下さったご本願、そのご本願のはたらきが本願力です。ですから、他力とは阿弥陀如来様が私たちを救済して下さるはたらきのことですから、「他力以前の問題」なのです。もう一つ言うならば、このことが他力か、あるいは自力か、あるいは他力でないかという問いは成り立たないわけです。しかし、よく小さな赤ちゃんと母親のことは他力に例える話として使われることがあるんです。「他力とは何ぞや」ということになると、いずれの行も及び難き身、自力では救われようのない、さとりを開きようがない私で在ります。ということが第一の根本であります。そして、無慙無愧の我が身という自覚があって、初めて他力ということがわかってくるのではないか、と思うのです。

他力本願という言葉について、非常にいい言葉がありました。他力本願という言葉は浄土真宗において教えの根幹に関わる最も重要なことであります。浄土真宗の宗祖・親鸞聖人が言われる他力とは、自然や社会の恩恵のことではなく、もちろん他人の力を当てにすることではありません。また世間一般で言う人間関係の上で自らの力、他人の力という意味でもありません。他力とは、そのいずれをも超えた廣大無辺な阿弥陀如来の力を現す言葉なのであります。本願とは、私たちの欲望を満たすような願いを言うものではありません。阿弥陀如来の根本の願いとして、あらゆる人々に南无阿弥陀仏を信じさせ、称えさせて浄土に往生せしめようと誓われた願いのことです。この本願の通りに私たちを浄土に往生させ仏になさしめようとするはたらきを本願力と言い、他力と言うのです。私たち念仏者は、このような如来の本願のはたらきによる救いを他力本願という言葉で聞き喜んで生きてきたのです。ここに初めて自らの本当の姿に気付かされ、今の命の尊さと意義が明らかに知られるのであります。だから人間・人生を力強く生きていく事ができるのです。じっくり聞いて頂くとわかりやすい言葉なのではないでしょうか。

「仏説無量寿経」には、阿弥陀如来はすべての衆生を救うために法蔵菩薩となって本願をたてられました。そして、衆生をされて本願を成就されたと「仏説無量寿経」には説かれています。如来によって成就された本願のはたらきが他力です。他力とは自己であれ他人であれ、全ての人間の力を超えた無限の絶対的な力のことを言うのです。ですから無限の絶対的な力という意味で、この他力のことを「絶対他力」という言い方をさせて頂く。あらゆる人間のはからい、そういったものを超えた、人間の力を超えた絶対的な力のことであります。これを「絶対他力」という言葉で私たちは頂いておるわけです。そして、その他力においては我々の志向や行動は全て無力、自力の否定ということを見落してはなりません。自力の否定ということが他力の根底にあるのです。人間は無力です。その無力であるということは一体どういったことなのでしょう。

(休憩)

→

他力の根底には、自力の否定があります。他人であれ、自己であれ、全ての人間の力を超えた絶対的な他力。人間の思い、行動というものは無力なのです。そのことに気付かせて頂くことが他力の根底であると言っていいのだと思います。では無力ということはどういうことなのでしょう。

「食欲・瞋恚・愚痴」という言葉を挙げました。これは三毒の煩惱と言いまして、私たちの煩惱は、数えきれないほどあると言われていのですけれども、全ての煩惱の根本にあるのが、この三つの煩惱と言われています。



こうした話を私の家族と話していました。娘や母も含め、良かった良かった。と肩を撫で下ろしていました。そんな時に父が言ったのです。「だけどこのやり方は学校として正しかったのだろうか？」

皆様はどう思われますか。1文字でも超えたら原則0点であります。それを原則というものをおいといて、合格させたということは、面接で人柄をみて、そして小論文は実際字数オーバーなら0点のはずですが、内容が良かったということなんでしょうね。しかし、これでほんとに良かったと済ませていいのでしょうか。そのことを父が言った時に、続けて上の娘がこう言いました。「そうだね。よく考えると自分がこの女の子を合格して良かった、学校は良い所を見てくれた、と思ったけれども、自分が最後の最後でこの子と合格を争う立場になって、この子が合格して自分が落ちたりしたら絶対に許さないとも思ったよ。原則0点のはずなのに。それなのに私が落とされることになったら認めることができないと思う」と言って、家族一同考えてしまいました。

何が言いたいのか。その時の自分の立場、境遇、もっというならば業というものによって良いか悪いかというものはコロコロと変わるのではないか。そのことをご開山親鸞聖人は歎異抄でこう言われたのです。

「さるべき業縁のもよおさばいかなる振舞いもすべし」

そういった業縁というものが自分の身に降りかかってきたならば、自分の身にそういった業縁というものが催してきたならば、何をやるかわからない私。場合によっては殺人すらしてしまうかもしれない私であるのです。自分の立場に立ってしか、自分の都合に合わせてしか、ものを考えることができない私達であって、そして自分の都合によって何を起こすかわからないのが私達であります。その根本にあるのが貪欲瞋恚愚痴であって、これは私達が逃れることのできない煩惱ですから、自力の善行では私達はさとりをひらくことはできないということになると思うんですね。自分の都合でしかものを考えることができない、自分の都合で善も悪もコロコロと変わってしまう私なのであります。

自力修行の人を聖道門という言い方をします。そして他力の念仏の人を、浄土門という言い方をして表しています。聖道門とは、この世で自己修行の力量で、聖者の位に入り、さとりを得ようとする道またはその教えを指します。浄土門に対する語です。これは自力門・難行道であるとされ、唐代初期の中国浄土居の祖師道綽の『安楽集』に、この聖浄二門が判別されているのです。

そして浄土門。阿弥陀仏の本願力によって浄土に生まれてさとりをひらく道。聖道門に対する語であります。浄土教ではこの聖道・浄土の二門によって全仏教を二分するのですが、浄土門は他力門・易行道であるとします。そういったことを頭に入れながら、聖道門という言葉が使われた和讃が「聖道門のひとはみな 自力の信をむねとせり他力不思議にいりぬれば 義なきを義とすと信知せり」と先述の和讃であります。これは正像末法和讃。私達が日頃の勤行でよく使う和讃でありまして、この聖道門で始まる和讃の五首目に「如来大悲の恩徳は 身を粉にしても報ずべし 師主知識の恩徳は 骨を砕きても謝すべし」と一般的に「恩徳讃」と言われる和讃が伝わってくるわけであります。

その「聖道門の人はみな～」今日はまさにこの和讃を題材にして絶対他力ということをお話ししたいと思ひまして、今申し上げているところなんです。けれども、「聖道門のひとはみな 自力の信をむねとせり他力不思議にいりぬれば 義なきを義とすと信知せり」。現代語訳を言うならば、「聖道門の人はみんな自力のこころを拠り所としていますが、他力不思議の浄土門に帰依しますと、自力のはからいではなく全て他力なのだと思知するので。」言葉の意味、語釈でございますが、「むねとして」のむねは宗・旨の意。最高のものとして。物事を中心として。第一として。根本として。と御座います。そして「義なきを義とす」とは、本願他力に対しては、行者の（自分の）はからいを交えないことを本義とするということでもあります。前の「義」ははからいの意で、後の「義」は本義の意である。こういった和讃があるということなんです。他力には「義なきを義とす」という言葉は、義

無きというものは、はからいが無いということです。それから、はからいが無いということは、自己を捨てるといふことであります。先ほど申しましたように、他力は自己を根底から否定することです。このことが、この義なきを義とすという言葉で私たちは教わられていると云っていいと思うんです。

自力を根底から否定する、ということ思い出さるるんです。有名な布教使の方がいらして、この布教使に一門某社が日頃の聴聞の両義をメモにしてお渡しになってご意見を求められたんです。それは、こんなことが書かれていました。

- 一、 無数の見えざる力によって、生かされてある私だったと、おかげさまをよろこぶ
- 一、 たまわった経ただ今の一点に全力を打ち込んで、せいっぱいベストを尽くす
- 一、 赤子のようなウブな心、純粹な心に帰って暮らす
- 一、 一輪の野の花、みちばたの石ころ一つとも対話して心を通わせる
- 一、 周りの人に「すみません、有難う」の気持ちを忘れず低い姿勢で火を送る
- 一、 仏さまご先祖さまのお護りで、私があらしめられることを常に喜ばせてもらう

こういったメモを布教使にお渡しになって、尋ねたそうです。私どもがこれを見ても、本当に仏法の心と言いますか、他力本願というものを覗き見る事ができ、見事に短い文章で表現されていると思うわけです。ですから、よくご聴聞されていると考えていいと思うのですが、皆様はどう思われるでしょうか。

これを一瞥した有名な布教使は、ただ一言添えられてそのまま返されたそうです。なんと書かれていたのか。

「右占めて地獄行。」

一体どういうことなのでしょう。非常にご聴聞され、本当に細かい言葉でまとめられ、まさに浄土真宗というかお念仏のころころというのがまとめられているように思うのです。しかし、布教使は何も言わずに「右占めて地獄行」と書いて渡されたのです。これはどういうことかと言いますと、この言葉は実にすばらしいご聴聞のように見えるのですが、すべて自己否定というものが抜けているのです。それすらできない私という認識が欠落している。ですから、こうならなくて、こうなりたい、こうなりましょう、ということでは、これは自力の念仏になってしまいます。他力というのは、全てそういった自分のはからい、自己の気持ち、あるいは行動というものがすべて無力である、と阿弥陀如来様が見抜いて下さっております。そんな私をご本願に遇わせて頂くことによって、全ての衆生を救うというそのはたらきにお任せするということでもありますから、自己否定というものがないとなるとこれは浄土真宗ではない、他力ではないということになってしまう。そのことが抜けているということを見抜かれて、その布教使は「右占めて地獄行」という言葉を添えられて、私たちへの戒めとして下さったと思うわけです。非常に印象的な言葉として、今でも私に教えて下さっております。

こんな言葉があります。「目を開けて眠っている人の目を開けるのはなかなか難しい。」これはあるお寺の門前にある掲示板に書かれていたものです。まさに自力によってさとりを得ようと、さとりを開こうと思っている人は救われようのない我が身ということがわかっていない。これはまさに眠っていることでもあります。で、その眠っている人にそのことを気付いてもらうということは難しい、ということが先ほどの和讃につながるのではないかと思います。

「聖道門のひとはみな 自力の信をむねとせり他力不思議にいりぬれば 義なきを義とすと信知せり」

聖道門の人、ようするに自力の善行の方は、その自力のころころを最高の拠り所としておりますから、どうしても他力ということがわからない。しかし、他力不思議の浄土門の教えに帰依したならば、聖道門の人でも皆全て自力のはからいではなく他力のはからいで、疑うころもなく、信じさせて頂くということが、「聖門の人は皆～」という和讃なのではないかと思うんです。

もう一つご紹介させていただきますと、浅原才市のことばであります。

「他力には自力も他力もありません。一面の他力、南无阿弥陀仏」

私たちの歩む道はですね、聖道門とか浄土門という道があって、ああいった道があると言っているわけじゃない。他力も自力もなく、他力しかないんだ。この他力しかないこの他力の道は、南无阿弥陀仏の道であり、南无阿弥陀仏と読んだ時に答えて下さる阿弥陀様のはたらきがあるのです。

11月はこの話の続きとして、この和讃のつながりで「如来大悲の恩徳は」という和讃があります。ですから今回は「恩徳讃」というサブテーマでさせていただきますと思います。

今回は、私たちの道は他力しかない、絶対他力しかないんだということを申し上げさせて頂いて今日のご縁にさせていただきますと思います。

平成 22 年 9 月 17 日